

要旨

本研究の目的は、2 型糖尿病をもつ統合失調症者に対して、病院と地域という異なる場の精神科熟練看護師が行う糖尿病悪化を防ぐためのケアの構造から、モデルとなるケアを記述し、対象者の地域移行と地域定着につながる看護への示唆を得ることである。

研究デザインは、グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続比較分析法を用いた質的記述的研究である。首都圏の精神科入院施設と精神科訪問看護事業所をフィールドとし、病院では看護師 5 名へのインタビュー、地域では 5 名の利用者と 4 名の看護師を対象にした参加観察とインタビューからデータを収集した。研究の全ての過程において、精神看護の専門家および質的研究者である指導教員によるスーパーバイズを受けた。

分析の結果、精神科熟練看護師による 2 型糖尿病をもつ統合失調症者へ行う糖尿病悪化を防ぐケアでは、{精神症状と身体症状をみて、モニタリングと介入を使い分ける} ことが行われていた。[全体を把握して、モニタリングと介入のバランスを検討する] 段階では、【本人・家族を理解する】、【不安要素を把握する】、【安心材料を把握する】ことで、【持っている情報を統合して、本人のいまの状態を把握する】ことを行っていた。その段階を経て、[モニタリングに重点を置き、本人を尊重しながらタイミングをみて介入する] 場合は、【他に介入を優先すべきことがあるときにはモニタリングに重点を置く】ことを行い、【介入が本人を脅かし、精神症状の悪化や関係性の悪化につながると判断したときは、モニタリングに重点を置く】ことを行っていた。そして、【本人を尊重する姿勢を持つ】った上で、【本人を脅かさず、強制的ではない軽い介入をする】ことや、【本人に理解しやすく、刺激も少ないタイミングや方法で介入する】こと、【本人が介入を必要としたタイミングを待つて介入する】といったケアが行われていた。そして[本人が安定した状態で生活が維持できるように介入する]場合は、対象者の糖尿病の【介入の必要性が高いときや、介入ができそうなきには介入に重点を置く】ことをしながら、【本人が暮らしやすいように間接的に介入する】ことが行われていた。

結果より、看護師は対象者を尊重した姿勢で精神・身体症状と対象者との関係性をみてケアを選択することの重要性が示唆された。このことにより看護師が余裕を持って対象者に適切なケアを行えると共に、対象者に実現可能なケアの方向性を示すことができることが示唆された。また、対象者が希望し、負担の少ない生活を送れるよう、看護師が支援者と協働しながら直接的にも間接的にも介入することは、対象者にとって現実的な地域移行と地域定着につながる支援であることが示唆された。